筑波社会科研究　第17号（1998）

韓国『国史』教科書における中・近世韓日関係史の叙述

尹　龍　爀*

はじめに

韓日の日本歴史教科書についての関心は非常に高い。それは近代韓国の歴史が日帝の侵略に対する抵抗を中心内容としており、そのため、日本教科書が関連部分をどう叙述しているかに対して，敏感な反応を持っている。このような点から，日本の歴史教科書の対韓国関係叙述は、韓国において単純な過去の記述の問題ではなく、現在日本の韓国についての認識と考えられている。

これからの韓日関係を考える時、日本のみならず、韓国の教科書が対日関係史の部分をどう書いているのかも気になる。実際、韓国の歴史教科書の記述問題は、80年代以後日本側の学者によってその記述の特徴などについて論議されたこともあった。[1)]

しかし、日本の歴史教科書の記述に関する論議に比べて、韓国の国史教科書の叙述についての論議は、ほとんどなされてこなかったと言えよう。それも近代史部分の記述についてはしばしば論議されたが、[2)] 中・近世の場合はまだ本格的に論議されたことがない。[3)] 韓日関係史における中・近世は戦争と平和、侵略と和解の両面が共存する。同時に古代史の資料不足や近代史の敏感さを避けながら、両国関係に対する客観的論議をより容易にするという長所があると思われる。

本稿は、まず韓国の国史教科書と教育課程の問題を簡略に紹介する。そして、中・近世韓日関係史の記述を検討し、これを通じて韓国国史教書における中・近世日本像の特徴を明らかにしようとする。[4)] ここで論議する韓国の国史教科書は、主に1970年代以降の中学校及び高等学校の国定『国史』教科書であり、必要によって国定以前の検定期の教科書を部分的に参考にした。

1．韓国の国史教科書と韓日関係史

(1)国史教育と教科書

韓国の国史教育の構造が大きく変わったのは第三次教育課程期からであった。1972年10月朴正熙大統領によって宣言されたいわゆる「十月維新」は、「韓国的」民主主義を指向したのであり、その教育的な側面からの後ろ楯の一つが国史教育の強化であった。[5)] 文教部は、国史教育強化委員会を構成し（1972)、国史科の教育課程を大きく改定した。その結果、中等学校の『国史』は社会科から分離されて独立教科になったのは勿論、大学においても必須科目として設定された。これとともに従来検定によって発行されていた中等学校の国史教科書が、1973年国定へ転換され、1974年からは国定教科書が使用されるようになった。それ以降、国史教科書の編纂は、国史編纂委員会が引き受けて、分野別に研究陣と執筆者を選定・依頼して、教科書を制作してきている。国史教育の教科は民族意識の強化にそのねらいがあった。第三次教育課程に提示された国史科の第一教育目標は「正しい民族史観の確立」と「民族的な自負心の育成」に置かれていた。[6)] このような民族意識の強調はその後、徐々に婉曲になっていったが、国史教育についての一般の認識は、相変わらず「国史教育は民族意識の育成すべき」という点に異存は見えなかった。

*韓国公州大学師範大学教授

第四次教育課程による国史教科書はこれまでの単巻から上下両巻で製作することになり、これによって叙述文量も大きく増えた。また、第五次教育課程の教科書からは版型を拡大して、製作するという編集上の変化を追い求めた。

韓国の学校教育における国史教育の強化は、教科的な論理よりも政治的な必要によったのは事実である。しかし、この問題にもかかわらず、他方は、日帝次期以後の植民地史観の克服という課題、そして米国の過度な影響に対応する必要により、自国史教育の強化は国民的共感に支えられたものであった。[7] このような主体性確立の必要性という共感によって、以後の政治的な変動にもかかわらず国史教育を重視する雰囲気が最近まで維持されてきたと同時に、自国の歴史や伝統文化に対する社会的関心も非常に広まっていくことになった。

韓国の中等学校の国史教育は、中学校と高等学校で同様な通史的な体系が二度繰り返されて学習されるという問題点がある。第四次教育課程の以後、教科書が中高ともに上・下二巻で作られに学年にわたって学習することになり、教科内容や教科編成も類似であったため、校種別の系統性の確立が強調されるようになった。即ち、第五次教育課程では中学校は政治史を中心に、高等学校では文化史と社会経済史中心の指導が強調されるようになった。

1988年以降韓国では約20年ぶりに国民の直接の投票による大統領選挙が行なわれ、以後社会のさまざまな分野で民主化の動きが広まっていった。このような変化は70年代以来の権威主義的な体制を否定する側面を持っていた。1992年に公布された第六次教育課程は、独立教科であった中等学校の国史科を再び社会科に復帰させた。国史科の社会科への統合の理由としては、もともと社会科の分野であったという事実とともに、「国際化社会への転換」という時代的な変化も上げられる。[8] そして、社会科国史の目標としては「民主社会の市民的な資質の涵養」が最も強調された。[9] この新しい第六次教育課程によって、1996年度からは、中等学校において新しい国史教科書が使用されるようになった。1974年以降4回にわたって刊行された国定の国史教科書は「国定一、二、三、四次教科書」、あるいは、教育課程の基準によって、「第三、四、五、六次教科書」などと呼ばれている。

国史教育が国史科から社会科国史へ、民族意識よりも「民主社会の市民的資質」の涵養が強調されるなど、大きな転換を迎えたにもかかわらず、学校現場で実際体感する変化は、まだまだである。それは教科編成における変化以外、具体的な変化が伴わなかったことに起因する。即ち、教科書は新たな教育課程に沿って新しく刊行したが、その編集や叙述などの実質面においては、あまり変化がなかった。それに、国定という体制も維持された。教科編成の改編にもかかわらず、国史教育の改善や変化が目立たないのは、このような改編が学会の十分な論議に基づかなかったのも一つの原因だと思われる。

(2) 国史教科書における中・近世韓日関係史の取扱い

教科書の記述内容に対する検討の前に、韓国の中等学校の『国史』教科書では中・近世の韓日関係史をこれまでどのように取り扱ってきたか、そして現在はどのように取り扱っているか、その概況を確認してみたい。記述項目を表にすると、以下のようになる。

表 1 『中学校国史』における中・近世韓日関係史の関連項目名

	13、4 世紀	15、6 世紀	「壬辰倭乱」	17、8 世紀
第三次教科書（1975）	「元の圧力と干渉」	「日本との関係」	「外敵の侵入と民族の抗争」	
第四次教科書（1982）	「高麗と元」「紅巾賊と倭寇」	「初期の対外関係」	「外侵の克服」	「通信使」
第五次教科書（1990）	「元との関係」「紅巾賊と倭寇の撃退」	「日本及び女真との関係」	「倭乱、胡乱の克服」	「通信使の派遣」
第六次教科書（1996）	「元との関係」「紅巾賊と倭寇の撃退」	「日本及び女真との関係」	「倭乱と胡乱」	「通信使の派遣」

＊　項目名。但し、「壬辰倭乱」は節の題目である。

表 2 『高等学校国史』教科書における中・近世韓日関係史関連の項目名

	13、4世紀	15、6世紀	「壬辰倭乱」	17、8世紀
第三次教科書（1976）	「麗元連合軍の日本征伐」「麗末政治勢力の性格と一般状況」	「日本及び東南アジア各国との関係」	「両班階級の分裂と二度の国難」	
第四次教科書（1982）	「元の内政干渉」「紅巾賊と倭寇」	「日本及び東南アジアとの関係」	「倭乱と胡乱」	「日本との関係」
第五次教科書（1990）	「自主性の試練」「威化島回軍と李成桂の執権」	「日本及び東南アジアとの関係」	「倭乱と胡乱」	「日本との関係」
第六次教科書（1996）	「自主性の試練」「威化島回軍」	「日本及び東南アジアとの関係」	「倭乱と胡乱」	「日本との関係」

＊ 項目名。ただし、「壬辰倭乱」は節の題目である。

表で見たように、『中学校国史』と『高等学校国史』の中・近世韓日関係史の取り扱い傾向は、ほとんど同様である。例えば、13、4世紀は、元の政治的圧力によって日本侵略に動員された内容を略述しており、倭寇については高麗末のみ外患の一部として言及されている。ただし『高等学校国史』における倭寇の叙述は国内の政治的状況に付随して、軽く触れている点において、差異がある。

15、6世紀の韓日関係については『中学校国史』が女真及び日本との関係を合わせて一つの項目を設定しているのに対して、『高等学校国史』では両者を分離させており、そして対日関係の項目には東南亜との関係も含めている。「壬辰倭乱」（豊臣秀吉の朝鮮侵略）については中・高とも多

くの分量を割り当て、中・近世の韓日関係史の中で最も大切な内容になっている。これに関する記述については項目ではなく一つの節（小節）が設けられているが、その記述内容項目を整理してみると次のようになる。

表　3　「壬辰倭乱」（秀吉の侵略）に関する叙述項目

教科書	『中学校国史』	『高等学校国史』
第三次教科書	「倭乱と民族の抗争」 「両乱の影響」	「壬辰倭乱」
第四次教科書	「壬辰倭乱」「民族の抗戦」 「丁酉再乱」 「倭乱の影響」	「倭乱前の情勢」「倭軍の侵入」「水軍の勝利」「義兵の抗争」「情勢の転換」「倭軍の再侵」「倭乱の影響」
第五次教科書	「壬辰倭乱」 「民族の抗戦」 「倭乱の影響」	「壬辰倭乱」「水軍の勝利」「義兵の抗争」「情勢の転換と倭軍の敗退」「倭乱の影響」
第六次教科書	「壬辰倭乱の発発」「水軍の活躍」「義兵の活躍」「倭乱の克服」「倭乱の影響」	「壬辰倭乱の発発」「水軍の勝利」「義兵の抗争」「倭乱の克服」「倭乱の影響」

上の表３でわかるように、「壬辰倭乱」に関する叙述は第四次教科書の以後、大きく増えているが、それは国史教科書が上下二巻で構成されて内容が全体的に詳しくなったことと関係がある。

17､8世紀の日本との関係に対する記述は、中学校と高校とは少々違っている。『中学校国史』では「通信使の派遣」といって、この時期、朝鮮からの使節の派遣を中心にしているが、『高等学校国史』では、徳川幕府との外交関係の成立をはじめ、当時日本との関係がもっと包括的に述べられている。

２．国史教科書に叙述された中・近世韓日関係史

(1) モンゴルの日本侵略と高麗

中世時代、高麗と日本との関係は、他のどの時代よりも両国関係が疎遠な時期であって、「類がない空白期」として特徴がつけられる。[10] 13世紀に至っては、モンゴルの侵略に対して、両国の間には共助の必要性が高まったが、これも終わりまで成り立たなかった。その結果、モンゴルに40年対抗した高麗は、返って日本征伐に動員された。

モンゴルの日本侵略については、現行の第六次教科書『高等学校国史』は、「自主性の試練」という項目の中で、「講和以後、高麗が最初に受けた試練は、日本征伐への動員であった。高麗は国号を元に変えたモンゴルの強要によって、日本征伐のための軍隊をはじめ、多くの人的物的の資源が徴発された。」として、日本遠征は事件そのものについてよりは、元の強要による高麗の自主性弱化という点が強調されてある。日本侵略が失敗した理由に対しては、台風を主要因として挙げているが、このような叙述はそれ以前の国定教科書とも類似している。だが、これを国定以前

の1960年代の検定教科書と比べると違っている。

1960年代の検定教科書の多くは、麗元軍の日本侵略を一つの独自的な素材として認識したので、別の項目の設けて叙述している。内容においても日本遠征が元の強要による征服戦争という側面よりは、倭寇問題を根絶しようとする高麗の内的な要求も加えられた麗元連合軍による日本侵略として描かれている。[11] しかし、日本遠征の当時は、倭寇問題はまだ主要な問題ではなかったので、これは事実に即した記述ではない。

したがって、高麗の日本遠征の従軍を自主性の弱化という政治的側面に焦点をおくのはより正しい理解だといえよう。高麗も元の日本遠征の最大の被害者だったからである。しかし、その失敗の原因を台風のみに求めているのは、不十分さを感じさせる。簡単な叙述であっても、侵略に対する日本側の対応とか、強要による高麗の従軍が戦局に及んだ影響など人間の主体的な側面が考慮される必要がある。台風という自然条件の強調だけでは、歴史的事実に対する十分な説明にはならない。それに、これは「神風史観」とも相通ずる性格を持っており、生徒たちの歴史的指向を育てるという側面からもそうである。

(2) 倭寇と15､6世紀の両国関係

高麗の対日本関係において大きく問題となったのは、14世紀の倭寇問題であった。長年、元帝国からの干渉期を経ながら弱化された高麗の状況のため、倭寇に対する軍事的対応には時間がかかった。

高麗末の倭寇の侵略については、中学校と高校教科書の叙述には相違がみえる。中学校では対外関係史の一部として扱っているが、高等学校では国内政治史と関連づけて短く触れている場合が多い。

『中学校国史』では、「紅巾賊と倭寇の撃退」という項目を設けて、14世紀の倭寇の侵入を扱っている。記述の内容は、「倭寇」の定義、倭寇の侵略による高麗の被害、そしてこれに対する高麗の軍事的対応などで構成されている。倭寇については「対馬島などに根拠をおいた日本の海賊」と定義し、倭寇の侵略に対する軍事的対応としての崔宝や李成桂の活躍、火薬武器の製作及び投入、朴威の対馬征伐などが記述されている。なお、第六次中学校教科書では「小主題学習」の欄を新しく設けて、「崔茂宣と火薬」という題目の解説文を加えているが、これは倭寇の撃退過程で初めに製作・使用された火器武器についての紹介である。この倭寇の問題は、当時北の大陸から受けた侵略（紅巾賊の乱）と繋がれて、高麗王朝の外圧の克服という側面から叙述されているのである。これに反して、『高等学校国史』で、倭寇は対外関係の事実よりも、倭寇による国内武将勢力の登場という、国内政治の視覚より簡単に書かれている。

15世紀に至って、両国の外交関係が活発になるが、それは新しい幕府と王朝の登場と共に倭寇問題の解決という懸案が掛かれていたからであった。従って、15､6世紀の朝鮮と日本との関係は、倭寇問題の解決過程とこれに基づいた交流の展開に重点が置かれていた。即ち、世宗朝の倭寇討伐の戦略としての対馬攻撃、倭寇対策としての三浦の開港による制限貿易の許容、三浦を中心とした当時両国の交易品などがそれである。

15､6世紀の日本との関係については、「日本及び東南アジアとの関係」、或いは、「女真・日本

との関係」などの項目を設定しているが、そこの叙述の重点はやはり日本に置かれている。但し、倭寇問題の解決に焦点が置かれていたため、その内容は、室町幕府との関係ではなく、対馬のような日本の一部地域との関係だけに止まっている。この点で、15､6世紀の朝鮮と日本との関係は、室町幕府との交流についても配慮する必要があると思われる。『高等学校国史』では、15､6世紀の朝鮮文化の中で室町幕府の美術に及んだ朝鮮の絵の影響を強調しているが、その背景にある朝鮮と幕府との関係は言及されていない。

(3)「壬辰倭乱」(豊臣秀吉の朝鮮侵略)

「壬辰倭乱」(文録・慶長の役：豊臣秀吉の朝鮮侵略)は、1592年から七年にわたる日本の朝鮮への侵略戦争として、中・近世の韓日関係史の中で、最も中心的な内容である。この戦乱は1592年からの「壬辰倭乱」と1597年日本の再侵による「丁酉倭乱」に分かれるが、教科書の表現をはじめ、通称「壬辰倭乱」あるいは「倭乱」といわれている。

しかし、1960年代頃の検定期教科書の中では「壬辰倭乱」と共に、「日本の侵入」とか、「日本軍の侵入」のような一般化して称するのも見える。[12] 最初の国定国史教科書の三次『高等学校国史』では、「壬辰倭乱」という項目名に「日本との七年戦争」と附記したこともある。壬辰倭乱を「日本との七年戦争」といったことについては、当時にも批判があったが、戦乱の性格に照らして適当な表現ではなかったと考えられる。

現行の国史教科書で、日本の侵略の動機が二つ指摘されている。第一点は、国内統一に成功した豊臣秀吉の不満勢力を撫摩するための政治的後略、第二点は、秀吉の大陸に対する侵略的欲望がそれである。

朝鮮側の対応としては朝鮮水軍の活躍と義兵の蜂起などを詳しく述べている。朝鮮水軍の制海権の掌握とともに農民・僧・儒学者たちが全国各地から自発的に蜂起して対抗したために未曾有の戦乱を克服したと叙述している。

戦乱の影響としては、朝鮮側の国土の荒廃、人口の減少、身分秩序の動揺などが指摘される。景福宮や史庫等の文化財の焼失が触れられており、侵略によって持ち出された活字、書籍、絵などと拉致された陶工や性理学者がその後、日本文化の発展に寄与した事実が書かれている。なお、明の弱化によって女真族が成長する原因となったことも戦乱の影響として述べてある。

思想的側面の影響については、第五次以後現行の教科書では言及されていない。しかし、第三次『高等学校国史』、第四次『中学校国史』では、民族意識の強化、日本についての強い敵対感情などを、戦乱の影響として指摘している。

(4) 17､8世紀の両国関係

壬辰倭乱以後、日本では豊臣政権が崩れて、徳川幕府が成立した。この徳川幕府の努力によって朝鮮との国交が再開され、以後二世紀にわたる平和的関係が維持される。侵略と抵抗という韓日関係史の厳しさとは異なって、この時期は両国の平和外交や文化交流が主な内容という点において大切である。

現行の『中学校国史』(第六次)では、1609年、両国の国交が再開された事実や経済的交易及び

通信使の日本派遣ついて書かれている。特に、通信使については、日本の要請によるものであり、文化使節として日本の文化発展に寄与したことを述べている。さらに、本文の挿絵以外、教科書の表紙の裏に通信使の行列図が背景画として使われている点は注目に値する。[13)]

『中学校国史』の中で、通信使を中心として17、8世紀の両国関係を叙述し始めたのは、第四次『中学校国史』からである。「通信使」という題目と共に、両国の間に外交関係が再開された経緯と交流の内容が説明されている。それに交流の内容として文化的交流が強調され、「松雲大師が日本人に書いてあげた詩文」「日本での朝鮮通信使の行列」など二枚の挿絵が載っている。そして、日本からは銅が輸入されて、たばこ、とうがらし、トマト、さつまいもなど大変有用な食物が伝えられたと述べている。以後、叙述の文量は少なくなったが、17、8世紀の韓日両国の関係についての叙述は教科書に定着されている。中学校教科書が通信使を中心とする文化的側面を強調したのに比べて、『高等学校国史』の場合は、「日本との関係」という項目で、両国外交関係の成立、通信使の派遣以外に、「獨島」問題についても言及している。[14)]

3．教科書の記述に表れている対日認識

ここでは教科書に表れている対日認識について検討しようとする。筆者は、韓国中・高校『国史』教科書の中・近世の韓日関係史叙述の基底をなしている対日認識は、次のような三つ、即ち「交隣国」「侵略国」「文化伝受国」として、捉えることができると思う。

(1)「交隣国」としての日本

「交隣」というのは、その文字通りの意味では、となりの国と仲良く交流することである。ところが、この用語は前近代時代朝鮮の対外関係においては「事大」と対になって使われた用語であった。朝鮮時代の対外観念は、中国との関係を「事大」として、そして他の周辺諸国との関係を「交隣」として思っていたが、ここには国の序列とか高低の観念が含まれている。即ち、「事大」が大国についての関係だとすれば、「交隣」というのは小国との関係を規定する用語であった。この点から、朝鮮時代の人々は日本を含めて周辺の諸国に対して、「交隣」的概念を持って付き合っていたのである。

また、「交隣」的概念は、韓国『国史』教科書の対外関係史の叙述で表れると思われる。たとえば、朝鮮初期の対日関係について現在の第六次『中学校国史』では、

「朝鮮は、女真及び日本に対して交隣政策を追求しながら強硬策と懐柔策をともに使った。……その後、日本政府や対馬島主が経済的・文化的要求によって、朝鮮と再び貿易することを請願してきた。また朝鮮も……彼らの要求に応じて、制限された貿易を許可した。」

と記述している。即ち、日本との関係は、日本側の懇請に応じて朝鮮が施す立場、或いは「交隣」的次元から許容する受け身的な立場が叙述されている。

当時日本の室町幕府と朝鮮政府との関係は外交的に対等な関係として設定されていた。それにもかかわらず、15、6世紀の日本との関係の叙述が、このように上下関係の交隣の印象を与えるの

は、基本的には当時の両国関係の特徴からである。15世紀における日本との関係は倭寇問題の解決という懸案によって進展された。このため朝鮮の外交は対馬や九州など、日本の西部地域の大名や商人の必要と利益を部分的に受容する方向に向けていった。日本といえども、実際の関係は、朝鮮側の必要性とは別にして、主に対馬などの地域を中心とする関係であった。ここでは朝鮮は受動的に、施すような立場になったことは当然であった。しかし、これを「日本との関係」と一般化するには無理である。

国定以前、1960年代の検定期の教科書では、前近代の対日関係は、一般的には、「倭との関係」として叙述されていた。ところが、教科書によって、15、6世紀の関係は「倭」や「倭人」との関係といいながら、日本全体に対してはしばしば「日本」と称して[16]「倭」と区別するケースも見える。国定教科書からは、公式的には「日本」と称して、15、6世紀の場合も、「日本との関係」のように設定されている。しかし、叙述の内容は依然として、対馬などを中心に制限されていて、結果的には前近代の日本との関係についての叙述は、上下の「交隣」的観念を与える恐れがある。[17]

(2) 侵略国としての日本

韓国において、日本に対する最も強烈な認識は、やはり「侵略国」としての認識だろう。これは近代の歴史にとどまらず、中・近世史にも遡る。14、5世紀の倭寇、そして七年間にわたる「壬辰倭乱」（秀吉の朝鮮侵略）がそれである。

倭寇の場合もそうであるが、特に16世紀末の7年間の「壬辰倭乱」は、否定的な対日認識を深化させた。これは一方的に起こされた戦争、そして戦争によって被った全国的な惨禍の問題もあるが、当時日本の侵略に対抗したものが、主に一般の人民であったからである。「義兵」と呼ばれたのがそれである。両班という儒教的知識人、一般農民、さらには仏教の僧侶まで、それぞれの地方より自発的に立ち上がり日本の侵略に戦ったために激しい対日認識が残されている。

「壬辰倭乱」についての教科書の記述は、侵略と抵抗を強調している。まず、先に述べたように、叙述の量が多く、叙述は戦乱の経過や先頭の様相を中心に描かれている。二つ目は、侵略軍に対する呼称の問題である。教科書では、倭軍、倭敵、日本軍、侵略軍、敵などの単語が混用されてきたが、「倭軍」のほうが侵略軍に対する最も一般的表現である。「日本軍」より「倭軍」のような単語が当時の資料的表現に近いもので、近代の日本軍とも区別される便利な点もある。しかし、この単語の使い方には、侵略勢力という点を強調する意味も含まれているのではないかと思われる。

「壬辰倭乱」の叙述で、日本の侵略的性格を強調しているのは、戦乱による朝鮮文化の日本伝播に関する、次の文からも伺える。

「日本は朝鮮から活字・書籍・絵などの文化財を略奪し、又、陶工や学者らを拉致していった。これは日本の文化の発展に大きく寄与した。」

「壬辰倭乱」の文化的影響を述べながらも、その侵略的性格を強調している。「壬辰倭乱」の叙述を通じてその侵略的性格を強調するのは当然なことと思われるが、全体的にこの側面が強調されすぎている感がある。

(3) 文化伝受国としての日本

韓国の国史教科書には、各時代ごとに文化発展の内容が記述されているが、その中で日本は韓国からの「文化伝受国」として描かれている。これは特に古代史を通じて強調されてきたが、19近世においての三つのところで述べられている。

「この時期の日本は、朝鮮文化の受容に熱狂的であって、多くの絵が日本に伝えられ、画壇に大きな影響を与えた。[20]」

これは15世紀における朝鮮の水墨画の技法が日本に影響を及ぼしたことについての記述である。「壬辰倭乱」の時、戦乱を通ずる文化伝播は、よく知られている事実である。教科書では、文化財や技術者と学者が強制連行されることによって学問や芸術分野に影響を与えた点が書いてある。17、8世紀に至っては、通信使を通して交流が強調されている。「通信使は、先進学問や技術を伝えてくれる文化使節の役割も果たすことによって、日本の文化発展に大きく寄与した。」というような記述がそれである。

近世時期、朝鮮文化の日本への影響は事実に依拠しており、日本の歴史教科書にもよく書かれている。しかし、これについての「国史」教科書の記述はあまりに概念的・注入的であって、実体を理解するには効果的でないと考えられる。

むすび

韓国における歴史教育の重要機能の一つは、民族教育に置かれている。これは、韓国が持っている歴史的特殊性と条件を考慮するときには避けられないと思われる。韓国は歴史的に外部から多くの侵略や圧力を受けており、とくに20世紀の前半の35年間は日本による植民地支配を経験した。さらに植民地より解放されてからは、民族が南と北に分断され、民族を再統一しなければならない課題を抱いている。したがって、韓国における「国史教育」は、このような民族的要求によって支えられている。[22] このような民族主義的な国史教育に対する国民の共感は根強く、それは政治的体制の変化にもかかわらず、「国史」を今まで中等学校の独立・必須科目として存置する理由になっている。

しかし、国際交流や相互理解が、さらに強調されていく趨勢を考える時、過度な民族主義的側面の強調がもってくる問題性に対しても真剣な考慮が共に要求される。何よりも偏った民族教育は閉鎖的で排他的な価値観や心性を育てる危険性をもっているかである。韓国の歴史教育に対して「世界史的普遍性と強調しうる開放された民族主義」が望ましいという指摘も、民族教育の不可避性と共に歴史教育が「閉鎖的な排外意識に流れる危険」を警戒したことであった。[23]

以上、韓国の歴史教科書と関連して『国史』教育の経過を簡単に紹介する一方、中・高『国史』教科書の中・近世韓日関係史の叙述の特徴を検討した。国史教科書における中・近世韓日関係史の主要内容は、13世紀の元の日本侵略の従軍、14、5世紀の倭寇問題とそれを巡って展開された対日関係、16世紀末の日本の侵略（壬辰倭乱）、そして17、8世紀における両国の平和的交流であった。このような歴史的事実を叙述を通じて形成されている日本のイメージは、交隣国、侵略国、文化伝受国としての日本であった。これは韓国の国史教科書がもっている民族主義的傾向を表わしているといえよう。

韓国の歴史教育は1970年代以後、国史教科の必須か及び国史教科書の国定化によって、民族主義的な傾向を帯びつつ展開された。これによる国史教育の強化は、一方で否定的側面も共に露呈した。国史教育の強化にしたがって相対的に世界史教育の弱化をもたらした点とか、教科書の国定化によって結果的に教科書の質的向上を構造的に阻んだ点などがそれである。

韓国の歴史教育が、開放的民族主義を目指しながら一層発展するための第一歩は教科書の改善にあると思われる。今後、中・高校の教科書内容の差別化、歴史的事実の記述だけではなく歴史学習の方法を教える教科書づくりが重要な課題であろう。また、「国史」という科目名も「韓国史」あるいは「韓国歴史」のように相対化する問題も、議論していく必要があるのではないか。

【註】

1) 横田安司「韓国の歴史教育」(『新しい歴史教育』5 歴史教育者協議会、大月書店、1994年、216-218頁) では韓国の国史教科書に表れた思想を、「熱烈な民俗自尊意識」「内在的発展史観」「民族史の正統性の強調」等、三点で要約している。また、高木享「韓国の自国史教科書－民族の誇り－」(『歴史はどう教えられているか－教科書の国際比較から－』日本放送出版会、1995年) は、韓国の国史教科書における記述の全体的な特徴を、韓民族の持続的な発展についての強調、そして外圧に対する抵抗強調するものだと要約した。(123-124頁) 教科書のみに限らず、韓国の民族教育についての理解を目指した、坂井俊樹『東北アジア地域の教育課題と社会科市民資質論の再検討－韓国において民族‘民族教育’を通して－』(「社会科教育研究」第74号、日本社会科教育学会、1996年、39-49頁) もこのような問題と関連がある。

2) たとえば、君島和彦「日本の朝鮮支配と韓国の国史教科書」(古廐忠夫編『東北アジア史の再発見－歴史上の共有を求めて－』1994年、有信堂高文社)、田渕五十生「韓国の歴史教科書と日本の歴史教育－韓国の中学校『国史』教科書に表れた近代日本－」(社会科教育研究会編『社会系教科教育の理論と実践』1995年、清水書院) 等がその例である。君島の論文は『教科書の思想－日本と韓国の近現代史』(1996年、すずさわ書店) に「韓国の国史教科書に日本がどう書かれているか」という題目で補完、再録されている。

3) 韓国の国史教科書について日本側が検討した草分け的な例としては、山田三雄『外国教科書の日本偏見』(芙蓉書房、1977年) がある。ここでは当時の韓国の国史教科書についても簡略に触れながら問題になると思われる事例を10項目にわたって挙げている。(95-99頁)

4) 中等学校における韓国史科目の公式名称は「国史」である。韓国史の学界では「国史」「国史学」という名称はまれであるが、中等学校の教科目名としては「国史」が一般的に使用されている。ここでもこれによって、「国史」という名称を使用する。

5) 南之大「高校国史教科書の近現代編の叙述と問題点」『歴史批評』1988年夏、ソウル、289頁参照。

6) 教育課程・教科書研究会編『韓国教育課程の変遷－高等学校』大韓教科書株式会社、1990年、97頁。

7) 横田安司「韓国の歴史教育」(『新しい歴史教育』5、歴史教育者協議会編、大月書店、1994年) は韓国の歴史教育の内容を教育課程の変遷、教科書、現場教師の実践に至ってまで幅広く整

理しながら、韓国の歴史教育の現実に対する批判的立場を堅持している。ここで指摘され　たそれぞれの問題は、韓国の歴史教育関係者たちに多くの示唆を与えている。但し、1970年代における国史教育の強化については、その政治的な側面があまりに強調されていると思われる。

8）教育部『中学校社会科教育課程解説』1994年、13頁。

9）教育部『高等学校社会科教育課程解説』1995年、146頁。

10）木田道太郎「中世における日朝関係（高麗時代）」井上秀雄・上田正昭編（「日本と朝鮮の二千年」1、太平出版社、1969年、145頁。

11）例えば、閔泳珪『最新国史』（良文社、1970年）は、「日本征伐」の項目で、「高麗を屈伏させたモンゴルは日本の朝貢を望んでいたし、高麗は問題を起こしていた倭寇の鎮圧を希望していたところだったので，両国は連合して日本征伐軍を起こさせたのである。」（112頁）とした。なお、李弘稙『国史』（東亜出版社、1970年）では、「モンゴルは日本の朝貢を要求していたところで、高麗も問題を起こし始めている倭寇の鎮圧を希望していたので、その二つの要求を合わせて、日本討伐を起こした。」（115頁）と書かれている。

12）李丙壽『国史』一潮閣、1968年；李弘稙『国史』東亜出版社、1970年。

13）現行『中学校国史』の裏の表紙は「正徳八年八月二十一日信使江戸登城行列絵巻」（部分図：国立国会図書館所蔵）の絵が使われている。

14）「日本との関係」のすぐ前にある「清との関係」では、豆満江流域の間島の領土問題を扱っている。

15）『中学校国史』上、1996年、175頁。

16）李丙壽『国史』一潮閣、1968年、『中等国史』乙酉文化社、1965年。

17）朝鮮での「交隣」という概念も実際には、対等な関係に用いられた場合と上下関係に用いられたのも両方あった。これについて閔は、前者を「敵礼的交隣」、そして後者を「羈縻圏交隣」と呼んで、朝鮮と日本政府は「敵礼的交隣」、そして朝鮮と対馬は「羈縻圏交隣」と設定されたといっている。閔徳基「朝鮮朝前期の‘交隣’にみる対外関係」『前近代東アジアの中の韓日関係』早稲田大学出版部、1994年、19-33頁。

18）『中学校国史』上、1996年、192頁。

19）現在使用されている六次『中学校国史』では、「文化伝播と交易」という項目で、そして『高等学校国史』は「三庫区分科の日本伝播」「統一新羅文化の日本伝播」などの項目を通じて、記述されている。

20）『高等学校国史』上、1996年、222頁。

21）『中学校国史』上、1996年、193頁。

22）李元淳「歴史教育の国際的視角」『韓国から見た日本の歴史教育』青木書店、1994年、144-146頁及び、同書の「望ましい韓日両国の歴史教育のために」165-169頁参照。

23）李元淳「歴史教育の国際的視角」145頁。